

[研究論文]

自発的・自治的活動といじめの未然防止との関連に関する一考察
-学級の間関係に関する議題を話し合う学級会を通して-
A Study on the Relationship between Voluntary and
Autonomous Activities and Prevention of Bullying
-Through a class meeting to discuss the agenda of class relationships-

脇田 哲郎
Tetsuro WAKITA

福岡教育大学教職実践ユニット

本研究は、学習指導要領（平成29年告示）に示された「学級経営の充実やいじめの未然防止等」につながる「自発的・自治的活動」としての学級会に視点を当て、どのような学級会が学級経営の充実やいじめの未然防止に機能するのか考察を深めようと試みた。現在、多くの学級会がどんな学級集会をするか、集会で何をやるか、役割分担はどうするのか等について話し合っている。その中で、K市では授業中の男子の問題行動について話し合った。N市では障害をもった級友との関わり方について話し合った。この学級会を指導した担任への聴取と学級会の発言記録から、教師が学級会の教育的な効果信じて、積極的に子供たちに話し合いをさせていることが見えてきた。そのために、児童の状態を見極め、発生した問題の今後の影響を見通していることも分かった。また、児童は、人間関係に関わる問題でも、他者の人格に留意しながら意見を発表するのだということが確認できた。

キーワード：自発的・自治的活動、学級経営の充実、いじめの未然防止、学級会、議題

1 研究の目的と方法

(1) 目的

小学校・中学校学習指導要領（平成29年告示）
高等学校学習指導要領（平成30年告示）（以下、学習
指導要領）には、次の内容が示された。

学習や生活の基盤として、教師と児童（生
徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよ
りよい人間関係を育てるため、日頃から学級
<ホームルーム>経営の充実を図ること。
（ ）中高の内容、< >高の内容

このことを受け、新学習指導要領小・中・高等
学校の解説特別活動編（以下、特活解説書）には
以下の内容が示された。

「学級<ホームルーム>活動における児童
（生徒）の自発的、自治的活動を中心とし
て、各活動と学校行事<各活動・学校行事>
を相互に関連付けながら、個々の児童（生
徒）についての理解を深め、教師と児童（生

徒）、児童（生徒）相互の信頼関係を育み、
学級<ホームルーム>経営の充実を図ること。
その際、特に、いじめの未然防止等を含
めた生徒指導との関連を図るようにすること。
（ ）中高の内容、< >高の内容

ここには、学級経営を充実させる具体的な方策
が、学級活動（以下、学活）とホームルーム活動
（以下、HR活動）の自発的・自治的活動である
ということが示されている。そして、そのことが、
いじめ等の生徒指導上の問題も未然に防げるのだ
ということも示しているのである。このことは、
特別活動への大きな期待である。

平成30年度の児童生徒の問題行動調査（文部科
学省）では、いじめの認知件数は543,933件であ
る。いじめを受けて苦しんでいる児童生徒や保護
者にとっては、教育課程に位置づいており時間制
では「学級活動」という時間の充実がいじめを改
善してくれるのだということになれば、特別活動
への期待は計り知れないものである。

学級活動における自発的・自治的活動とは、児

童生徒が自ら話し合っ、目標や方法を決めたり役割分担をしたりして、学級の友達と協力して実践する話し合い活動や、係活動、学級集会活動のことである。

平成20年告示の小学校学習指導要領解説特別活動編には、「望ましい集団活動」の6つの条件が次のように示されていた。

- ア 活動の目標を全員でつくり、その目標について全員が共通の理解をもっていること。
- イ 活動の目標を達成するための方法や手段などを全員で考え、話し合い、それを協力して実践できること。
- ウ 一人一人が役割を分担し、その役割を全員が共通に理解し、自分の役割や責任を果たすとともに、活動の目標について振り返り、生かすことができる。
- エ 一人一人の自発的な思いや願いが尊重され、互いの心理的な結びつきが強いこと。
- オ 成員相互の間に所属間や所属意識、連帯感や連帯意識があること。
- カ 集団の中で、互いのよさを認め合うことができ、自由な意見交換や相互の関係が助長されるようになっていること。

特に、学級集団の目標の共通理解や方法・手段の共通理解、役割分担の共通理解は、学級集団の心的な結びつきを強めることになり、学級経営の充実に機能すると考える。

森田(2010)は「いじめを止めたり、仲裁したりするには、その場の雰囲気への同調志向、自己保身といった意識を超える価値観を育成していくことが必要」であり「そのためにいじめ問題を『個人化』させず、『公共化』させる力を子どもたちにつけ、自分たちの手で課題を解決するよう、主体的に参画させていくことが必要」であると述べている。つまり、学級内のいじめている子供に「人をいじめるのは良くないから止めろ」と、自分がいじめられたらどうしようという思いを振り払って伝えたり、学級内のいじめにつながるような問題に気づいて「そういう問題はおかしいからみんなで話し合っ解決しよう」と他の子供たちに働きかけたりする子供の育成が必要だと述べているのである。このような子供を育てるのが「学級会」と呼ばれることが多い学活(1)の話し合い活動である。

しかしながら、全ての学級会が学級経営の充実に向かうような、いじめの根絶に向かうようなものであるのかというと、ここに大きな問題が残されている。本研究では、学級経営の充実やいじめ

等の生徒指導上の問題解決に機能する特別活動とはどのようなものであるのかを、F県で実施された2つの学級会を通して考察してみたい。さらに、これまで行われた学級会の議題から子供の問題意識と学級会の議題についての考察を加えてみたい。

(2) 方法

F県で実施された①、②の学級会から、本学級会の実施に至るまでの担任の具体的な指導内容を明らかにするとともに、学級会における児童の発言から、いじめ等の問題の解消につながる学級会についての考察を深めたい。さらに、報告者が参観した学級会や子供の問題意識を調査したアンケート調査の結果から学級会の議題や問題意識についての考察を深めたい。

- ① 2017年12月にK市立H小学校の6年X組で行われた学級会
- ② 2020年12月にN市立N小学校の6年Y組で行われた学級会
- ③ 報告者が参観した116の学級会の議題や教育センター受講者のアンケートの調査結果から子供の問題意識について考察する。

2 研究の実際

(1) 2017年12月に実施されたK市立H小学校の6年X組の学級会

① 学級会の概要と担任の指導の意図

写真は、2017年12月に行われた、F県K市の6年生の学級会の一コマである。

表1に示すように学級会の議題は「みんなが安心してできるクラスにしよう」であった。

提案理由は「クラスで発表するときに、ニヤニヤしてとなりの人とこ

そこそ話をして、クラスの人がいやな思いをしているので、そんなことをなくしたいから。」というものであった。

本議題が生まれた背景について担任に聴取すると、次のような説明があった。「2学期も間もなく終了しようとする頃、『男子の何人かが、女子が発表するときにニヤニヤ笑ったり、隣の人と顔を見合わせてコソコソと話したりするようになっ



写真は掲載許可取得済み

た。とても嫌な思いをしているので、そのような行為はやめてほしい。この学級でのいい思い出をもって卒業したい。』という訴えが数人の女子から担任にあった。」ということであった。

さらに担任は、「この学級の子供たちは、これまで学級集会なども計画してみんなで協力して実践してきており、人間関係もより良いものになってきているので学級会の議題として取り上げ、学級全員でこの問題について協議しても大丈夫だ」という確信があった。」とも語った。そして、「この問題をこのままにしておく」と学級の雰囲気が悪くなり、私に訴えてきた女子たちの担任への信頼も崩れると考えた。」ということであった。

表1 K市の学級会の概要

議 題	みんなが安心できるクラスにしよう
提案理由	クラスで発表するときに、ニヤニヤしてとなりの人とそこそそ話をし、クラスの人がいやな思いをしているので、そんなことをなくしたいから。
本議題が生まれた背景	2学期も間も無く終了しようとする時、男子の何人かのふざけた行為が見られるようになった。その時、女子からそのような行為はやめてほしい。いい思い出をもって卒業したい。という意見が出され学級会の議題として取り上げられた。
担任への聴取	1学期から学級会は実施してきており学級集会なども経験してきている。その結果、男女関係なくなっても言える人間関係が育ってきていると判断したので、計画委員会と話し合っ学級会の議題として取り上げることにした。

担任への聴取を通して、次のような事項が明らかになった。一つは、担任が学級の人間関係などの状況がどの程度なのかを把握しているということである。二つ目は、問題をこのままに放置していたら学級の雰囲気が悪くなるだろうという見通しを持っているということである。そして、三つ目に、「学級会」という児童の自発的、自治的な協議の場への教育的な効果を期待し、信じていたということである。

② 学級会の児童の発言からいじめ等の問題の解決の可能性の考察

表2は、学級会の進行を担う計画委員会が計画した「話し合うこと①」の『何をするか』の冒頭の部分である。ここでは、授業中に笑わないようにするために自分たちで何をするかのを話し合うように計画されていた。しかし、C1とC4は「笑うこと自体がおかしい」C2「イライラしたりムカつく」と、授業中に笑っていることに対する嫌悪感を率直に伝えている。さらに、C3になると「〇〇たちが笑っている」と、笑うという行

為をしている人物の名前まで言っている。授業中に笑わないようにするために何ができるのかを発言する場面であっても、子供たちの発言には「どうしても言っておかなければならない」「嫌だったことを分かって欲しい。」という怒りや不快などの言葉となって表出されている。

C5になって「笑わないようにするために紙に書いておく」という、本題に迫った意見が出てきている。しかし、C1やC4の発言のように本音で語る学級会であるということが、いじめ等の問題解決には必要ではないかと考える。

表2 学級会の発言記録

C1：これまでも何回もあったから、そういう人は自分のことだとわかっていないし、それを言ってもただ目が合ったから笑っただけと言ったりなんか理由が合ったから笑っただけと言ったりするけど、笑うこと自体がおかしいから、そういう人はちゃんと意識して欲しいと思います。

C2：私も、C1さんと同じで、今でもその辺で笑っているのを見たらイライラしたりムカついたりするからそんなのはやめたほうがいいと思います。

C3：私も、C1、C2さんたちと同じで、この辺の人や〇〇さんたちが目を合わせて笑っているから、それはやめたほうがいいと思います。

C4：今までの人と似ているけど、笑うこと自体がおかしいし、この学級会の提案理由にもあるように笑うのをやめるべきだと思います。

C5：自分は、笑わないように意識しているんだけど、意識するというのは授業中に笑わないように努力するというのもあるけど、他にも、笑わないようにするというのを忘れないように紙に書いておいて自分からしないと行動することも意識することだと思います。

下線は報告者

この日の「何をするか」という話し合いでは、表3に示すような意見が採択された。採択された意見は、自分で笑わないように意識したり相互に注意し合ったりといった実践可能な事項である。

この話し合いで却下された意見は表4の通りである。子供たちは、どうすれば笑わない学級になるのかという具体策を真摯に協議するのだが、友達の人格を否定するような事項については、取り上げていない。そのようなことをしてはいけないということをお子供たちなりに判断しているのである。子供たちは、これまで経験してきた学習や生

活の中である程度の道徳性や規範意識を身につけてきている。だからこそ、教師は、子供たちが間違っただけを決めてしまうのではないかとためらうのではなく、子供たちを信じて問題解決を委ねることも大切だと考える。

表3 学級会で採択された意見

- 自分が笑わないように意識する。
- 隣の人が注意する。(一人で言えないときは、周りの人も一緒に注意する。)
- 発表している人の方を向く。
- 発表している人のことを笑った人数を帰りの会で報告する。
- 質問されて、まちがって笑われたら、笑った人が質問に答える。

表4 学級会で却下された意見

- 仲良しの人でも、授業中に目を合わせないようにする。
- 笑った人の名前を帰りの会で発表する。
- 机の上に紙を貼っておいて笑った人の名前を記入する。
- 笑っている人の机を離す。

(2) 2020年12月に実施されたN市立N小学校の6年Y組の学級会

① 学級会の概要と担任の指導の意図

次の写真は、2020年12月に、F県N市の6年生の学級会の一コマである。

表5に示すように議題は「学級の問題を解決しよう」であった。提案理由は「休み時間に一人の人がいます。また、RとTと関わっていません。誰一人悲しい思いをしないで、27人みんなが楽しいと思えるクラスにしたいと思い提案しました。」であった。



写真は掲載許可取得済み

本議題が生まれた背景について担任に聴取すると「10月にRとTの双子の兄弟が転校してきた。子供たちは大喜びで、歓迎会を開いて迎えた。しかし、発達障害の診断が出ていた弟のRは、怒りっぽく、カッとなると暴力を振るったり椅子を振り上げたりするようになり、次第に学級の友達と疎遠になってきた。そのような時に、あんなに歓迎し

たのにRと関わらないのはおかしい。Rのことを知らないでRと距離を取っているのは学級全体の問題だと、女子の日記に書かれていたので、このことを議題化した。」というような説明があった。さらに、RとTの転校もRの起こした問題が原因で前の学校に居づらくなったということだった。

さらに担任は、「日記を書いた女子とは、このことを学級会の議題にしていいかと確認をとってから、計画委員会と議題化していった。」ということだった。そして、「本学級は、5年生の時から話し合い活動や係活動を通して、楽しい学級を自分たちでつくるという自発的・自治的な活動を中心にした学級経営を行ってきたので、R個人の問題を学級会の議題に取り上げても大丈夫だという確信があった。」ということであった。また、「このことをそのままにしていたら、学級の間人間関係はより良いものにはならないと考えた。」とも語った。本学級の担任は、発達障害を持ったRの保護者とも学級会の前に十分に連絡を取り「今度の学級会では、Rの日常の言動からくる問題を話し合う。」ということを伝え、了承を得ている。

表5 N市の学級会の概要

議題	学級の問題を解決しよう
提案理由	休み時間に一人の人がいます。また、RとTと関わっていません。誰一人悲しい思いをしないで、27人みんなが楽しいと思えるクラスにしたいと思い提案しました。
本議題が生まれた背景	10月にRとTの双子の兄弟が転校してきた。子供たちは歓迎会を開いて迎えたのだが、怒りっぽいRは次第に暴力を振るうようになり学級の友達と疎遠になってきた。Rのことを知らないでRと距離を取っているのは学級全体の問題だということで議題化された。
担任への聴取	Rと学級の子供たちに、今後どのように関わっていけばいいのか話し合わせることでその他の子供たちとのより良い関わり方についても考えるようになることを期待したので学級会の議題として取り上げることにした。

担任への聴取を通して、次のような事項が明らかになった。一つは、学級会の議題を児童の日記などからも見つけようとしていることである。二つ目は、K市の6年生の学級担任と同じように、問題をそのままに放置していたら学級の雰囲気が悪くなるだろうという見通しを持っていることである。そして、三つ目は、特別に配慮が必要な児童の問題でも、保護者と綿密な連携を取りながら、子供たちの問題として取り上げ、子供たちに解決を任せようとしていることである。

② 学級会の児童の発言からいじめ等の問題の解決の可能性の考察

この日の学級会では、表6に示す通り、はじめに、なぜRと関わりを持ちにくいのか自分の考えを公表し合っている。

C1からC4、C8は、自分のことではなく学級のみんなの関われない理由を公表している。それが、C6、C7、C9になると、自分が関われない理由を公表している。C6は「自分が壁を作っている。」C7は「Rが怒ったら怖い。」C9は「Rが怒ったら面倒臭い。」と自分の思いを素直に表現している。C10は、Rの発言である。Rは「友達が怖がっていると思うと自分も関わりづらい。怒るたびに友達が減っていくのでないかと心配だ。」ということを発言している。

表6 学級会の発言記録

<p>C1 : RとTは教室でけん玉をして遊ぶことが多く、外で遊んでいる人とは関わっていないから、<u>一部の人としか関わっていないのではない</u>と思います。</p> <p>C2 : RとTには<u>関わりづらいとか、話しかけづらい</u>と思っている人がいるから関わっていないと思います。</p> <p>C3 : C2と同じで、<u>関わっていないのは、話しかけづらい</u>と思っているからだと思います。</p> <p>C4 : 自分もC2と同じで、<u>話しかけづらいので関わっていない</u>と思います。</p> <p>C5 : 今、話しかけづらいと言った人に質問するんだけど、<u>どういところが話しかけづらい</u>のですか。</p> <p>司会 : いま、なぜ関わりづらいのかということから、<u>話しかけづらい</u>という意見が出たのです。</p> <p>C6 : <u>自分は、壁</u>というか<u>そんなのを感じている</u>ので、<u>話しかけづらい</u>とか<u>話が長続きしない</u>と思います。</p> <p>C7 : 自分もTとは班も一緒なので関わっているけど、Rとは、<u>関わっていない</u>。<u>Rが怒った時にちょっと怖い</u>ので関わっていない。</p> <p>C8 : Rとは、これまで色々あって、<u>みんな「怖い」</u>と思っているので<u>関わっていない</u>と思う。</p> <p>C9 : また、<u>話を</u>していて怒ったら、<u>正直言って面倒臭い</u>し、<u>友達として接しにくくなる</u>から、また、<u>怒らせないように</u>もしている。</p> <p>C10 : 僕も、<u>友達が怖がっているの</u>じゃないかと思うと<u>関わりづらい</u>。怒った時は<u>気持ちが抑えきれなくて、怒るたびに友達が減っていく</u>んじゃないかと心配です。</p>
--

下線は報告者

C6やC7、C9が自分の気持ちを素直に発表したから、Rも自分の正直な気持ちを公表できたのではないだろうか。その後のRは、これまでのような衝動的な言動が少なくなったということである。

(3) 学級会の議題や子供の問題意識についての考察

① 学級会の議題について

図1のグラフは、報告者が平成28年度から令和元年度までに参観した116学級の「学級会」の議題の種類である。

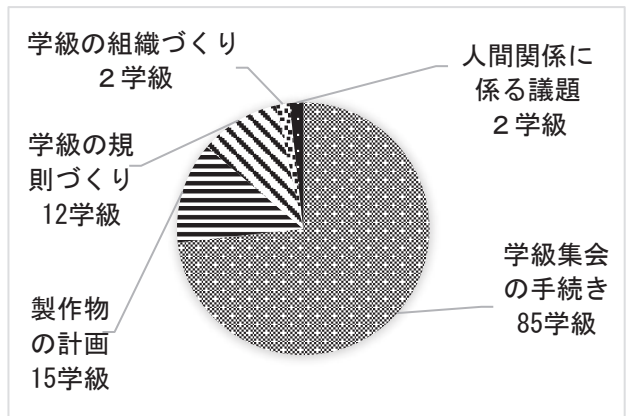


図1 学級会の議題の種類

実施された学級会の議題は「学級集会を開こう」などの学級集会の手続きが85学級、学級の旗や歌などの製作物を作るための計画に係る議題が15学級、学級の決まりなどをつくる議題が12学級、学級の係などの組織づくりに関する議題が2学級、そして、いじめなどにつながる学級の人間関係に係る議題は2学級であった。このように、現在の学級会で話し合われる議題は「学級集会の手続き」が圧倒的に多いのである。学級集会の手続きなどの議題も、学級編成間もない、まだ学級を構成するメンバーの人間関係が十分に形成されていない頃の学級では有効だと考えるが、このような議題ばかりに終始して学級経営の充実に機能するのか疑問が残る。

なぜ、このように「学級集会への手続き」に関する議題が多いのだろうか。文部科学省が特別活動の指導資料として示した「楽しく豊かな学級・学校生活を作る特別活動」(平成26年)には『どうぞよろしくの会をしよう』という議題で指導案例が示されている。そして、学級会の話し合うこととして「①どんな遊びをするか」「②どんな工夫ができるか」「③どんな係が必要か」をあげている。また「みんなでよりよい学級・学校生活をつくる特別活動」(平成31年)には『4年〇組か

るた大会をしよう』という議題で指導案例が示されており、話し合うこととして「①かるたに書く内容」「②友達のことをもっと知るための工夫」

「③必要な係」が示されている。この二つの議題は、どちらも学級集会の手続きを話し合うものである。文部科学省が示す指導資料は、若手教員の大量採用とともに、少なくなってきた先輩教員のOJT的な役割を果たすことをねらいにつくられたものである。これまでは、学校に身近に存在する先輩の教員から、特別活動の指導法などについて指導を受ける機会には恵まれていたのだが、学校の年齢構成も年々変わってきている。そのようなことから、教科書もない学級活動をどのように指導すればいいのか分からない若年層の教員にとっては、「緑本」と呼ばれるこの書籍がバイブル的な指導資料である。それ故、影響力も大きい。だからこそ、若年層教員をはじめ、特別活動の研究を始めた学校や始めようとする学校の教員も参考にすることが多い。

ただ、この資料はあくまでも参考であり、学校や学級の実態に応じて、指導のあり方も柔軟に変えていくことが求められるものである。しかし、本資料に書かれたことが全てであるかのように、全国で取り込まれる学級会の議題や話し合うことが一律的であるということにも問題があるのではないかと考える。

さらに、学級集会の手続きなどを話し合っている学級会の多くで感じたのは「子供たちは、この議題を本当に話し合って解決したいと思っているのか。」ということであった。子供たちの切実感や必要性を感じない学級会が多くあった。「先生が話し合えて言ったので、仕方なく話し合っている。」という雰囲気を感じる学級会もあった。これでは、学級経営の充実やいじめの未然防止には程遠いと考える。

もちろん、学級編制があっただけの学級では、学級成員の人間関係も十分に形成されておらず、学級集会などを計画して「みんなが仲の良いクラスにしよう。」という共通の目標を設定し、その目標を達成するための学級集会を開くという解決方法を決め、学級のみんなで役割を分担して実践する活動を通して、学級成員の心的な結びつきを強固なものにするということ是有効な指導方法であると考えられる。

秋山(2014)は、学級集団が形成される3段階を表7のように示した。ここに示されたステップを「為すことによって学ぶ」という特別活動の指導原理に照らして考えるならば、新学期間もな

い学級集団では、前述したように人間関係が十分に形成されておらず、教師が中心となって学級会の進め方や係活動の取り組み方を教えなければならない。このような時期に学級集会の手続き(何集会を実施するか・○○集会で何をするか・○○集会を開くための役割分担はどうするかなど)を話し合うことは、この学級会を通して、学級会の

表7 3段階学級集団形成モデル(秋山, 2014)

第1 ステップ	教師 主導型	教師が主導しながら、児童に望ましい集団活動を体験させる時期
第2 ステップ	児童の 自主的 活動へ の移行期	児童の多くが集団活動に慣れ、自主的に活動を進めることができるようになる時期
第3 ステップ	児童の 自主的 活動期	児童が生活の中で課題を見つけ、自主的な取り組みを計画実践することができる時期

前の段階や学級会での話し合いの段階、学級会で決まったことを実践する段階でどのようなことを行えばいいのかを学ぶことができる。

ただ、学級の集団は、狩野・田崎(1990)が示すように、徐々に学級の成員間や係などの小グループを構成するメンバー間に、相互の依存関係が生まれ、目標や規範を共有し集団として成長していく。このような集団の質の高まりに応じて、学級生活に生じる問題に気づかせていくことも学級担任には必要になってくると考える。K市やN市の6年生が行った学級会の問題なども、このような学級担任の働きかけがあって生まれてきた議題である。

表8 小中学校の学級活動の目標

第2 各活動・学校行事の目標及び内容 小学校〔学級活動〕 中学校〔学級活動〕 1 目標 <u>学級や学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。</u> 下線は報告者
--

表8は、学習指導要領(平成29年告示)に示された学級活動の目標である。下線の部分が学級

活動(1)「学級や学校の生活づくりへの参画」にあたる内容である。この内容は、学級生活の向上を目指して話し合ったり役割を分担したり協力して実践したりする。この時、子供たちの生活の捉え方が、大切だと考える。子供たちの生活は「喜びや楽しさ、嬉しさ」という快の感情だけに基づいている訳ではないと考える。時には「悔しさや悲しさ、怒り」といった感情が生まれることもあると考える。K市の6年生の「授業中に意味もなくニヤニヤ笑われてムカつく。」といった感情や、N市の6年生の「怒ったら暴力を振るわれるのではないかと怖い。」といった感情である。

宮坂(1968)は、「子供たちが話し合う問題の中に真に生きたリアルな問題が埋もれたままになっている。」と指摘している。教師には、学級の集団を自主的、実践的な集団へと成長させるとともに、学級の児童生徒の生活から生まれる生きた問題に気づく目を育てていくことが求められると考える。

② 子供の問題意識について

表9は、F県教育センターの講座の中で、受講者の学級の子どもたちに「今、学級で問題だと思うことは何か。」というアンケート調査を依頼した時の結果である。この結果からC3,C4,C5,C7,C8,C9,C11,C12,C13,C15,C16などの子供たちは、学級内で見られる人間関係に関わる事象を問題だと思っていることが分かる。図2は「AIテキストマイニング」(User Local社)の結果であり、児童が書いた文章の中でよく出現する単語ほど大きな文字で表記されるものである。

表9 子供たちが考える学級の問題

- C1:自分もだけど、朝の挨拶をする人もいればしない人もいること。
- C2:朝の声出しが、まるで遊びのようになっている。なんのためにしているかわからないこと。
- C3:女子と男子の力関係の差があること。
- C4:男女の関わり。ガッチャン鬼などでまだ壁を感じるから。
- C5:ある友達に「(プリント)を早く回しいよ!」と強く言っている人を見かけること。
- C6:先生を嫌っている人をなくしたい。
- C7:友達を無視したようになってしまうこと。挨拶をしたとしても声が小さいこと。
- C8:私は、本当はみんなとたくさん関わりたいと思っている。みんなで協力したい。
- C9:人の悪口や陰口を言う人がいること。
- C10:マイナス発言は雰囲気が悪くなるから言わないようにみんな意識したい。
- C11:発表の音が小さい友達に、何も言わずに聞く人と、小さい声で「全然聞こえん」と文句のように言う人がいる。このような差別が問題。
- C12:自分は何もしていないのにたたいてくる。嫌がっているのにやめない人がいる。
- C13:授業中にうるさい人がいる。言わなくていいことをわざわざ声に出して言うところ。
- C14:女子に敬語を使う人をなくしたい。
- C15:6の2に、話しかけづらい友達がいること。
- C16:人をこわがるところ。苦手な人とも関わり認め合う力をつけたい。
- C17:先生が教室を出たら「あー疲れた」「だるい」などの声が聞こえてくる。先生が戻ってきたら静かになるところが問題。
- C18:発表する人が決まっているところ。同じクラスなんだから、もっとみんなの考えを聞きたい。
- C19:決まった人しか返事をしていないところ。

しかけづらい」「こわがる」などの単語で表される感情を有していることが分かる。

このような学級であれば、教師が意図的に、学級の問題として取り上げて、自発的・自治的な学級会にするという手順を踏みながら、計画委員の子供たちを中心に学級に所属する子供たちと議題化していくと、学級集会の手続きだけではない「話しかけづらい学級を改善しよう。」やC8の子供が言っているように「学級のみんなと関わって怖がっている人を無くそう。」などの議題が生まれてくると考える。学級内の人間関係に目が向いていないのは、学級担任自身であることも考えられる。先の指導資料には、議題を集める工夫として「議題ポスト」や「朝の会や帰りの会での情報収集」「給食時間などの子供の発言」などが紹介されているが、日記や作文などに書かれた子供達の内なる声にも積極的に耳を傾けていくことも大

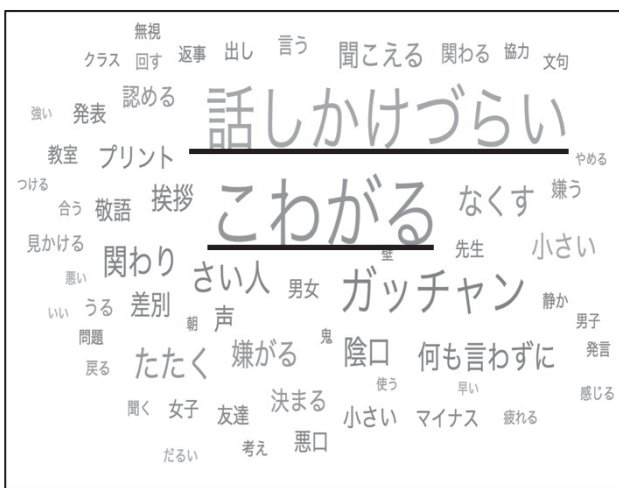


図2 本学級の子供が感じている問題

本学級では「話しかけづらい」「こわがる」という単語が大きく表されている。このことから、本学級の子供たちは、学級内の友達に対して「話

切だと考える。桑野（2021）は、子供の課題を引き出すための関わりとして、日記を書かせている。初めは、遊んだことや好きなもの紹介だった日記に、担任がコメントを返していくうちに少しずつ悩みや学級の課題について書くようになり、そこに書かれたことが学級会の議題に取り上げられたと述べている。

図3に示したように、子供たちの人間関係に関する問題は、全てが議題になるとは限らない。中には、教師がすぐに指導をしなければならない

「教師に助けを求めてきた問題」「子供の安全を脅かすような問題」「学年や学校で取り上げなければならない問題」「一部の子供の攻撃になるような問題」などがある。このような問題が出てきた時には、まず、対処しなければならない。

しかし、中には、このことを話し合わせることによって学級の集団がいじめの問題を「共有化」して仲裁者として育つことが期待される問題もある。十分な吟味は必要だが、K市やN市の6年生の学級担任のように、学級の子供たち一人一人をどのように育てるのかという見通しを持っておくことが肝要だと考える。

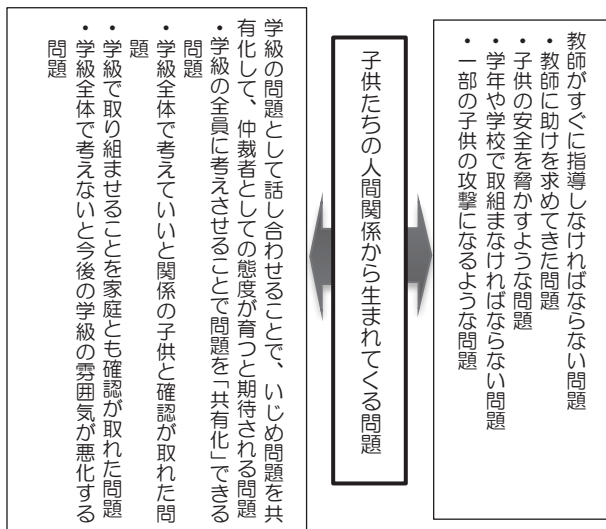


図3 子供たちの人間関係から生まれる問題

3 総合考察

学級会の授業研修会で協議に上がるのは「学級会でどのように話し合いをさせるか」ということであり、「学級会とは本来何の時間なのか」ということが協議されることは少ない。学級会の研究会で話し合いの仕方だけを追求していても、学級経営や、いじめの未然防止等につながる自発的・自治的な学級会にならないと考える。

橋本（2011）は、子供が「傷付く」ことから逃げずに、子供たちがぶつかる問題を自分たちで解決することで学級集団が信頼関係で結ばれると述べている。傷付くというのは、言いにくいことも伝えるということである。K市であれば「人が発表するときに笑うのは失礼だ。」N市であれば「君がかつとして暴れるのは怖いのだよ。」ということ、遠慮せずに言い合える学級の集団をつくっていくことを目指していかなければならない。

宮坂（1968）は、学級活動の前身である「生活指導」を生き方の指導だと言い、その生き方を①子供がすでに身につけているもの、②具体的な行動の仕方とその行動を生み出している見方・考え方、③毎日の個人的、主観的なものを指す、と捉えている。現在の学級活動(1)で行われる話し合い活動「学級会」も、児童一人一人の生き方を問題とするものにならなければ、いじめの未然防止に至るような機能は発揮しないと考える。さらに宮坂は、子供の生き方を取り上げるために教師がしなければならないこととして、a 子供一人一人を知ること、b 教師と子供の人間関係を改造すること、c 子供の疑問を育て、要求を育てること、d 子供相互の人間関係を改造すること、e 子供の真実の心を開いてやること、と述べている。このことは、現在でも通じる教育観であると考えられる。教育課程の中に位置付けられた「学級会」と呼ばれることの多い学級活動(1)の話し合い活動を学級経営の充実やいじめの未然防止等に機能させていくには、教師が、子供たち一人一人の生き方に関わっていく教育活動の実践が不可欠であると考えられる。

今後は、学級集団の質の高まりとともに、人間関係も含む学級生活の問題に気付かせるだけでなく整理するとともに、学級経営の充実やいじめの未然防止につながる児童生徒の資質・能力を検証する評価の在り方について明らかにしていきたい。

引用・参考文献

- 秋山麗子 2014 特別活動を中心にした小学校の学級集団形成に関する研究 関西学院大学教育学論究 6 195-207
- 橋本定男 2011 特別活動を通じた学校の特色づくり 日本特別活動学会紀要 19 17-21
- 狩野素朗 田崎敏昭 1990 学級集団理解の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 桑野美咲 2021 豊かな友達づくりにつながる学級活動(1)の研究 福岡教育大学教職大学院年報第11号
- 宮坂哲史 1968 宮坂哲文著作集Ⅰ・Ⅲ 明治図書
- 森田洋司 2010 いじめとは何か教室の問題社会の問題 中公新書 2016
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説特別活動編
- 文部科学省 2017 小・中学校学習指導要領